

三隅達郎のレクリエーション観 に関する研究

(株) 余暇問題研究所 谷戸一雅

キーワード) レクリエーション観 理論と実践 人間形成

I. はじめに

現在の日本におけるレクリエーション運動の隆盛、および国民のレジャー・レクリエーションへの関心の高揚は、かつてみられなかった発展ぶりを示していると言える。

この背景には、経済成長、技術革新、コマージュリズム等、様々な社会的要素が考えられる。

中でも特に見逃せないことのひとつに、レクリエーション運動の発展、推進に地道な努力を尽した数多くの人々の功績があげられよう。

三隅達郎氏は(以下三隅と略)は、まさにその中のひとりであると言えるだろう。

三隅は、現在のレクリエーション運動の中心的存在とも言える(財)日本レクリエーション協会はもとより、その前身母体とも言える日本厚生協会の時代からレクリエーション運動に深くかかわりを持っている。その他にも、社会事業での活動、職場演劇の指導、国際基督教大学におけるレクリエーション・ワークショップなど、多方面において長年にわたり現場の一端でレクリエーション運動を実践してきた。また、レクリエーションについても数多くの著作を通じてその考えを示している。

このように三隅の実践面と理論面には、見るべきものが非常に多いように思われる。

一般に、わが国のレクリエーション関係においては、レクリエーション史に関する研究は多数見られるが、個人に焦点をあてた研究は、皆無に等しいようだ。

同時に、三隅を知ることは、現在レクリエーション運動にかかわっている者や、これからレクリエーションを学ぶ者、あるいはレクリエーション運動を志す者にとって大いに参考になるものと思われる。

そこで、三隅のレクリエーションに対する考え方やなわちレクリエーション観を追求するに至った。

研究を進めるにあたっては、個人が人格や考え方を形成する過程において、その育った家庭、時代、社会的環境から受ける影響を無視することはできないと考え、三隅の出生から現在に至るまでの経緯を追求した。

また、三隅の著書や各種文献に掲載されている論文などの吟味、検討を試みた。

以上のような観点から、三隅本人のインタビューと著作を通じて三隅のレクリエーション観をとらえようと考えた

II. 人生の歩み

1. 出生から学生時代

三隅は、明治32年(1899)4月10日、山口県山口市で父断母礼士の長男として誕生した。生後まもなく受洗。

山口市の師範附属小学校で4年まで学び、その後神戸の諏訪山小学校へ転校。小学校の頃は病弱だったと三隅は言っている。

大正2年、神戸市の第一神戸中学校(現兵庫県立神戸高校)へ入学。同校では水泳部に所属し、また1年から5年まで遠足委員も務めていた。

大正3年、三隅はその後の人生に大きな影響を与えることとなった、キャンプを初めて経験する。これについては、三隅著『キャンプに生きる』⁽¹⁾に詳しい。

他に「当時の主任教員の影響で、仏像や寺社を訪ねるのが好きだった」⁽²⁾とも語っている。更に加えて、クラブに興味を持っていたこと、ゲームに関心があったことなどキャンプをはじめいろいろな活動を楽しんでいた。

三隅は、当時を振り返り「とにかく楽しい中学時代で、好きなようにさせてもらい、自分の好きなことをやってこれた」⁽³⁾と言っている。

大正8年早稲田大学へ進学。経済学を専攻する。早稲田大学に入学した後も相変わらずキャンプに熱中していた。

その時にあって注目すべきことがある。大正10年小林弥太郎氏(以下小林と略)との出会である。

三隅が、初めてキャンプを経験した時と同様にこのめぐりあいは、後の三隅の人生にそして考え方に非常に大きな力を与えることとなる。

ここで三隅が師と仰ぐ小林についてふれておく。

小林は、青年時代アメリカへ留学し、コロンビア大学においてはジョン・デューイに学び、帰国後、教会活動をはじめ社会事業も手がけていた。また、キャンプにも熱意を傾け山中湖、竹園、野尻のキャンプなど数々の教育キャンプを開拓した。

三隅は小林の関係していた教会でのアルバイトを機に、これも小林の手がけていた社会事業のひとつ、日暮里愛隣団で子供の夏期学校を手伝うようになる。以後、小林との結びつきはますます深まっていく。三隅は、有形無形多くのものを小林から学んだ。これらのことは、前出『キャンプに生きる』⁽⁴⁾や、その他多くの著作からも読みとれる。三隅自身も「小林さんとの出会いは大きいことだった」⁽⁵⁾と述懐している。

2. 愛隣団時代

大正14年、早稲田大学卒業後、学生時代から奉仕していた愛隣団に就職。児童部を担当した。

翌、15年1月25日、三隅は中村その(明治37年4月5日生)と結婚。

この愛隣団時代に、三隅はまたひとつの大きな経験をす

る。昭和3年、アメリカ・カナダへ3年間留学したことだ。この内の2年間は、カナダ・トロント大学社会科学科で社会事業とグループ・ワークを学ぶ。またトロント大学2年目の夏期休暇では、周辺のキャンプ場視察や実際にカウンセラーとして指導にもあたっている。当時のことについて三隅は「留学中の事、特にキャンプめぐりの体験が大きい」⁽⁶⁾と言っている。

昭和6年6月、留学を終え帰国ふたたび愛隣団へ戻る。その後愛隣団を退職する昭和14年まで、竹岡キャンプのディレクターをはじめ様々な場面で活躍する。

3. 日本厚生協会時代

昭和13年4月、日本厚生協会設立。その翌年、三隅は愛隣団を退職し協定会産業福利部へ移る。そこでは「企業内のレクリエーションを担当していた」⁽⁷⁾と言っている。

その例を示すものとして、勤労者厚生大会の記録が『日本レクリエーション協会20年史』⁽⁸⁾にみられるが、これにも三隅は関係している。更に、協定会内の勤労者演劇会にも関係している。

昭和16年、産業福利部は大日本産業報国会に合併され、それに伴い三隅も大日本産業報国会参事として働く。

しかし、ここでは自分の興味に関係ない分野に配属されてしまったことや、大阪市の厚生協会から誘いがあったことも手伝って同年、大阪市厚生協会主事に就任している。

続く昭和17年、満洲国奉天市において開催された東亜厚生大会に参加し「厚生運動における大東亜民族の習俗の交流」と題し、研究発表を行っている。

昭和18年、日本厚生協会主事に就任。終戦をむかえるまで主事を務めたが、「自分のビジョンを実行できない」⁽⁹⁾と当時を振り返り『日本レクリエーション協会30年史』⁽¹⁰⁾にもその例が、見受けられる。このようないきさつから三隅は、終戦後ふたたび協定会へ戻る。

この時期三隅に注目すべきことがある。それは、「セツルメントで指導していた頃はキャンプやゲームといった活動そのものをいかにするかを考えていただけで、レクリエーションの意識は持っていなかった」⁽¹¹⁾そして「協定会で職場演劇を担当するようになった頃からレクリエーションを考えはじめた」⁽¹²⁾と言っていることだ。こうした変化は、日本厚生協会設立による影響も考えられよう。また「とにかく独学でレクリエーションを学んだ。これも小林さんの影響が大きかった」⁽¹³⁾と話している。

この戦時中に、三隅の中にレクリエーションを考えるあるいは意識する、という姿勢が生まれてくるのである。

4. 終戦から現在

終戦後、協定会はG. H. Q. の意向により解散され、中央労働学園大学として生まれ変わる。三隅は、同大学において社会事業論を担当した。

昭和22年、石川県において開催された第1回全国レクリエーション大会に実行委員として参加している。翌23年、

日本レクリエーション協会が設立するが、設立以後同協会の理事、顧問としてその発展に尽している。

昭和26年、ガリオア人事交流で3ヵ月間渡米している。

昭和28年、国際基督教大学(I. C. U.)へ着任。

レクリエーション概論を担当する。また、同大学においてレクリエーション運動の発展をめざし昭和31年よりレクリエーション・ワークショップを始め、各地の大学や地域の指導者を集めその成果を上げている。

昭和37年には、G. D. バトラー著『Introduction to Community Recreation』を翻訳、『レクリエーション総説』⁽¹⁴⁾として出版される。続く昭和38年、キャンプの第一線からの引退声明を発表。

その後、I. C. U. を定年退職し関東学院大学へ移る昭和53年、関東学院大学退職。この間にも日本キャンプ協会、日本レクリエーション研究会、日本レクリエーション学会等、それぞれ設立のときから理事あるいは顧問としてその発展のために多大な貢献をしている。

III. 著作からみたレクリエーション観

次にもうひとつの観点である著作を通じてみた三隅のレクリエーション観であるが、今回検討の対象とした文献は昭和24年7月から昭和54年7月までに出版されたものである。そのうちわけは、著書4、編書7、各種雑誌や機関誌、紀要に掲載された論文およびエッセイなど37である。

これらの中から、特にレクリエーションについての考え方がよく表われていると思われるところに注目した。以下それらを順次とりあげる。

1. 自分でするという事

「レクリエーションの根本はどこまでも自分自身でやる事が主要である」⁽¹⁵⁾「レクリエーションの問題に関する限り”何々のために”という出発点から始められるべきものではない・・・中略・・・興味を引いたからやってみた。そしたらおもしろかった。こんなよい結果が出てきたという順序でありたい。」⁽¹⁶⁾「何かをすることこそ大切であって、理屈を先に立てても何にもならないし、面白くもなかろう。」⁽¹⁷⁾とみられるようにレクリエーションは目的性を持たせずに自主的に興味のむくままに行うものだとしている。

2. グループ・レクリエーションの意義

グループ・レクリエーションに関する記述も多く見られる。いくつかを示すと「私達の日常生活を顧みるとグループとしての生活が実に下手ではないだろうか。・・・中略・・・スポーツやキャンプやゲームなどで楽しみながらこのグループ生活の経験と技術を身につけられるとしたら何と有難いことではないだろうか。グループでするレクリエーションをより一層活発にして行かなければならない。グループで楽しむことが結果として我々に望ましい経験と技術を身につけることとなるなら何よりのこととい

わねばならない。・・・我々は何処までもグループでのレクリエーションが楽しいからやるのであって、グループ生活の経験と技術とを身につけたいためにこうしたレクリエーションをやるのではないということである。」⁽¹⁸⁾ また「人々は、他の人々との交わりを通じて興味を分かちあい、同時にグループに属しているという自覚によって、所属感や安定感をみたくすることとなる。そして、個人個人をより社会的にすることが、レクリエーションのグループ活動によって現実となり、社会的人格の形成が、いつのまにか実現すると考えてよかろう。」⁽¹⁹⁾ などとみられる。このように、グループ・レクリエーションによって、集団生活の技術や知識が得られるだろうという可能性を示唆している。

3. 車の両輪説

これについてもたびたび文献に認められる。ひとつには「ある特技を持っていて人々を指導しうる人、側面で理論づけをし、究明している学者、何事によらず熱意をもって奉仕を買って出るボランティアの人たち、えんの下の手伝いで満足し、その分担したことを完全に遂行している人、こうした人たちはすべて指導者と名のつく人たちでなくてはならない。

理論づけをする学者だけがエライのではない。いろいろの技能を指導できる指導者だけがエライのではない。・・・中略・・・それぞれの分野を受け持つ全指導者が協力一致して前進を心がけてこそ、始めてすばらしい結果を見せることとなるであろう。」⁽²⁰⁾ と見られる。また「口先だけで、レクリエーションをお題目のようになりかえして居る人種と、理論はぬきにして実践に血道をあげる人種とが出てきた。しかし、一面、レクリエーションは、その結果よりも、やっていること自体に価値があるのであるから、体験することがもっとも大切である。そして、体験と理論とが車の両輪となって回転して、はじめて、真のレクリエーションとよぶことができると思うのである。」⁽²¹⁾

さらに、「レクリエーションをどう思うかと言ったら車の両輪説になる。」⁽²²⁾ と述べている。このように理論と実践がうまくかみあうことを指し、実際にレクリエーション運動にかかわっている者で理論ばかりを重視することなく、理論の実践の場として現場をとらえ、実技や経験にこだわっている者も、理論を軽視することなく、裏づけのある指導を指摘している。

4. レクリエーション道

レクリエーション道ということも目につく。「結果的にみて人間形成に役立つレクリエーションであるということとは、日本古来の”道”の精神と一致するのではなかろうか。柔道といひ華道茶道といひ、弓道とよぶことは夫々の技を楽しみつつ修得しているうちに究極において人間形成に大きな役割を果たしていることになっていることと相通じるもののあるのを見出すものである。」⁽²³⁾ 他に「いまでは、柔道のみならず、剣道、弓道、華道、茶道などのよびか

たもおこなわれている。・・・中略・・・術が、たんなる小手先の技術の習得と究明にとどまっているのにたいして、道は技術の習得と究明に人間形成をつくわねばならないと考えるとよかろう。そうであるならば、レクリエーションにおいても、レクリエーション活動とよぶよりも、レクリエーション道と考えるのが当然と思われるし、これまで輸入ひとすじにやってきたわが国にも、ここで、レクリエーション道のありかたを諸外国に輸出してもよいのではないだろうか。」⁽²⁴⁾ 以上のように”道”の考え方すなわち技術のみでなく、究極的には人間形成につながるような道の精神とレクリエーションを結びつけている。また、従来輸入一辺倒であったわが国のレクリエーションも、日本古来のものを見直し日本の風土にあったものを生み出し、逆に輸出してもよいのではないかとやっている。

5. 人間教育の一端になう

人間の成長あるいは、人格の形成ということは多くの文献に見られる。それらをいくつか拾ってみると「感情的な、精神的な人格の育成が不可欠な要素とならねばならない。」⁽²⁵⁾ 「遊びも教育の一環として重要視されているが遊びの中に更に多くの要素を含めたレクリエーションこそは、全人教育の一環として人間教育に大きな役割を分担しているものといわねばならない。」⁽²⁶⁾ 「レクリエーションがいろいろな望ましい副産物を身につけさせてくれることは、誰も否定していない。レクリエーションが人間教育の一端を担っていると信じられているのも、こうした観点からである。レクリエーションは人間の成長を目差す活動であると考えてのではなく、”目的なき放出”式にレクリエーションを楽しんだ結果、それが人間形成に大いに役立ったと考えるのである。」⁽²⁷⁾ 「人間はあらゆる経験を通じて成長してゆくのであって、この経験こそ教育であると考えてべきである。こうした広義の教育がレクリエーション活動を通じて行われるのであって、レクリエーション活動が主として行われる余暇こそわれわれにとって最も大切な時であると再確認しなければならない。」⁽²⁸⁾ 「われわれは、日常生活の経験をとおして、いろいろの栄養をとることができる。とくに余暇におこなわれる活動をとおしてさらに多くの栄養がとれるとなったら、これほど、ありがたいことはない。真の教育は人間形成である。余暇になされる活動、すなわちレクリエーション活動が、人間教育の一端になう教育活動とされるようになったのも、そこにあるといわねばなるまい。」⁽²⁹⁾

三隅は真の教育は人間の成長であると言っている。そしてあらゆる経験が人間を育成させるとしている。中でも余暇になされるレクリエーション活動は人格の形成にあって必要不可欠なものと言っている。

6. レクリエーションの理解

「レクリエーションだが、レクリエーションを殊更にレクリエーションと意識しない程に各自の生活の中に見出したいものである。丁度我々が無意識に空気を呼吸しつづけて生き、育てて行くように。」⁽³⁰⁾「レクリエーションという呼び名が片仮名であり、舶来好きな日本人の性格にピッタリの関係もあって、戦後、レクリエーションが急激にわが国の隅の隅まで行きわたった。・・・中略・・・レクリエーションなどという言葉は犬に食われてしまえばよいのだ。このカナ8文字を百万遍唱えてもならレクリエーションにはならない。お念仏ではないのだ。私は、人々がレクリエーションと言わなくなったときにこそ、ほんとうに“レクリエーション”が理解され、われわれの生活の中に全く溶け込んでしまって、真に人間らしい生活をわれわれが享受することになると考えている。今はレクリエーションの過渡期に過ぎない。」⁽³¹⁾「レクリエーションというものが真底からわれわれの生活の中にそしゃくされ、浸透した暁にはレクリエーションという八文字は不用になるだろう。」⁽³²⁾これらにみられるように、人々がレクリエーションと言わなくなったとき初めてレクリエーションは、理解されると言っている。また、あわせて不用な商業主義や、一時の流行に左右されることなく、レクリエーションを正しく理解することを述べている。

以上が、レクリエーションについての考えをよく示していると思われるところである。

更に、三隅は昭和30年後半まではレクリエーションを説明するに、プラント、フィッツジェラルド、ブライトビルらを引用していた。

しかし、昭和40年「近ごろ想うこと」⁽³³⁾に初めて自分のレクリエーション概念を示している。それは次のように表されている。

「レクリエーションとは意識すると意識しないにかかわらず、また、能動的であろうと受動的であろうと、楽しい感情を伴う経験であって、そのものに満足があり、各自の自由意志により個人または集団でなされるあらゆる行為である。そして、それはすべて原則として余暇になされる活動であって、結果的には人間教育の一端になう教育活動である。しかしある結果のために行われるものであってはならないし、また、客観的、社会的な評価に耐えうるものでなくてはならない。」⁽³⁴⁾

これより以後、三隅は常にレクリエーションを説明する際にはこの表現を用いている。

IV. まとめ

以上、三隅の人生の歩み、発表された文献を見てきた。三隅のレクリエーション観となるとはやはり協調会以後、すなわち三隅が、レクリエーションを意識しはじめた頃からが注目される。もちろん、それ以前の経験が全く無視されるわけではない。

さて、そこで三隅のレクリエーション観をまとめてみるとそれは時の経過と共に少しずつ変化が見えるように思われる。ここでは、三隅のレクリエーション観は、次の3点にまとまるのではないかと考えた。

1. 自主性、無目的性

これは、比較的早い時期の文献に見られるものであるが、プラントやブライトビルらを引用し、レクリエーションの根本は自発的に行い自分の好みによって選ばれるものであるとしている。

同時に、ある目的のために行うものではなくあくまでも自分の興味に基づいてするものであると言っている。ここにはアメリカのレクリエーションの考え方が影響しているのではないだろうか。また、三隅の少年時代から学生時代の経験も何等かの影響があるのではないだろうか。

2. グループ・レクリエーションの意義

とかく日本人は、集団生活やその活動の技術に欠けることを指摘し、グループで行うレクリエーションは、集団生活の知識や技術を養う上で大きな役割があると考えている

これは、レクリエーション分野においては、体育学系の出身者が比較的多い中で、自身は経済学を専攻していたこと。また、社会事業に長くかかわってきたこと。更に、カナダ留学中トロント大学で社会事業とグループ・ワークを学んだことなどが、関係していると思われる。

3. レクリエーション道

柔道や剣道、茶道といった“道”の考え方は、レクリエーションと一致すると考えている。単なる技術の習得だけでなく究極的には、人間形成に役立つものとしてレクリエーションをとらえている。

またあわせて、今まで輸入ばかりにたよっていたレクリエーションの知識や技術を考え直し、日本古来のものを見直しより日本の国情にあったものを求めるべきではないかと言っているのではないだろうか。

これらの変化は、現状に満足することなく常に新しいものの、よりよいものを追求しようとする三隅の姿勢、また自分の経験の積み重ねがかかわっているとも考えられよう。更には社会の背景も当然関与していると思われる。

しかし三隅はレクリエーションを語るとき必ず人間の成長を結びつけている。

これは、三隅の多くの著作や、インタビューにおいても表われている。三隅のレクリエーション観は、人間の成長を抜きにしては考えられずレクリエーションは、人間形成にとって必要不可欠なものと考えていると言えよう。

このことと同時に、三隅の歩んで来たレクリエーション運動の足跡は、我々に多くのことを教えているのではないだろうか。

V. 今後の課題

今回は、三隅のレクリエーション観をとらえるにインタビューと文献に求めた。

常に人間の成長を主張する根底には、三隅の宗教観、倫理観、世界観などが関与しているものと思われる。今回の研究においては、これらをふまえたうえでの思想の追求には至らなかった。より深く三隅の思想を知る上では今後に残された大きな課題であると考ええる。

また、三隅と同時代にレクリエーション運動を支えた人々との関係や、愛隣団キャンプの参加者、各種講習会の参加者や家族など第三者の意見、感想等を取り入れればより市のひろい人間像がとらえられ得るのではないかと考える。

注

- (1)三隅達郎 キャンプに生きる 高文堂新書 S.53
- (2)S.59, 11月15日のインタビューより
- (3) 同 上
- (4)前掲(1)
- (5)S.59, 11月29日のインタビューより
- (6)前掲(2)
- (7) 同 上
- (8)日本レクリエーション協会 日本レクリエーション協会20年史 日本レクリエーション協会 S.41
- (9)前掲(5)
- (10)日本レクリエーション協会 日本レクリエーション協会30年史 日本レクリエーション協会 S.52
- (11)前掲(2)
- (12) 同 上
- (13) 同 上
- (14)G.D.バトラー著 三隅達郎訳 レクリエーション総説 ベースボール・マガジン社 S.37
- (15)三隅達郎 「レクリエーションということ」 労務研究 P. 18 S.25
- (16)三隅達郎 「教師と余暇」 教育じほう P. 152 S.35
- (17)三隅達郎 レクリエーションと健康 健康ガイド P. 8 S.39
- (18)三隅達郎 レクリエーションについて 体育の科学 P. 381 S.35
- (19)三隅達郎 レクリエーション盲言 労働の科学 P. 17 S.44

- (20)三隅達郎 きょうからあすへのレクリエーション指導者 月刊レクリエーション P. 5 S.41
- (21)三隅達郎 レクリエーション IDE教育選書 P.P.13-14 S.43
- (22)前掲(2)
- (23)前掲(18) P. 381
- (24)前掲(21) P.P.44-45
- (25)前掲(15) P.18
- (26)前掲(18) P. 381
- (27)三隅達郎 「レクリエーション」の意味するもの 病院 Vol.26 P. 16 S.42
- (28)三隅達郎 レクリエーション概観 文化活動資料 No.175 P.P.5-6 S.44
- (29)前掲(21) P. 28
- (30)前掲(15) P. 19
- (31)三隅達郎 近ごろ想うこと 人事院月報 第177号 P. 3
- (32)三隅達郎 レクリエーションの八文字 月刊レクリエーション P. 5 S.47
- (33)前掲(31)
- (34)前掲(31) P. 2